



筑紫女学園大学リポジット

Jinabhadra' s Demonstration of the Existence of jīva : A Study of the First Chapter of Ganadharavāda (4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/976

ジナバドラのジーヴァ存在論証

—ガナダラヴァーダ第一章和訳研究(4)—

宇 野 智 行

Jinabhadra's Demonstration of the Existence of *jīva* :
A Study of the First Chapter of Gaṇadharavāda (4)

Tomoyuki UNO

筑紫女学園大学研究紀要 第14号別刷

2019年1月

福岡県太宰府市石坂

Reprinted from *Journal of Chikushi Jogakuen University*

No. 14, pp. 1–12, January 2019

Ishizaka, Dazaifu-shi,

Fukuoka-ken, Japan

ジナバドラのジーヴァ存在論証

—ガナダラヴァーダ第一章和訳研究(4)—

宇 野 智 行

Jinabhadra's Demonstration of the Existence of *jīva* : A Study of the First Chapter of Gaṇadharavāda (4)

Tomoyuki UNO

0.	導入	vv. 1987-1999
0.1	ガナダラの紹介	vv. 1987-1993
1.0.1	インドラブーティの慢心	vv. 1994-1999
1.0.2	インドラブーティとマハーヴィーラの邂逅	vv. 2000-2002
1.1	対論者の前主張	vv. 2003-2008
1.1.0	インドラブーティの疑問 (本章の主題)	v. 2003
1.1.1	直接知覚 (pratyakṣa) に関する前主張	v. 2004
1.1.2	推理 (anumāna) に関する前主張	vv. 2005-2006 (v. 2006まで訳出済)
1.1.3	聖言 (āgama) に関する前主張	vv. 2007-2008

1.1.3 聖言 (āgama) に関する前主張

【VĀBh 2007】

(VĀBh (b, c): 1552; VĀBh (d): 2031; VĀBh (e): 2027)

「[また、これ (アートマン) は] 聖言によって理解されるものでもない。なぜなら、聖言はその推理とは区別されないからである。さらに、その人にとってジーヴァが直接知覚され、その言明が聖言となるような人は決して存在しない。」

nāgamagammo vi tato bhijjati jaṃ nāgamo 'numānāto /

na ya kāsai paccakkho jīvo jassāgamo vayaṇaṃ //2007//

[Skt.: nāgamagamyo 'pi tato bhidyate yad nāgamo 'numānāt /

na ca kaścīt pratyakṣo jīvo yasyāgamo vacanam //]

【VĀBhSV on VĀBh 2007】

'nāgama'-[云々] という韻文について。また、これ (アートマン) は聖言 (āgama) によって理解されるものでもない。なぜなら、聖言は推理とは区別されないからである。例えば、ここで、上に向かって輪になった唇形状 [の土を] 引き伸ばして出来た (kuṇḍalausthā-

yatavṛtta), 首部などを持つもの (grīvādimat) に対して, 「瓶」(ghata) という言葉の使用が見られたとしよう. その後, 「瓶」という言葉を聞いただけで, 肯定的・否定的共在関係を通じて, その同じものに対して「[瓶である]という」推理が生じる. しかしながら, 「瓶」と同じように, この「アートマン」という言葉が身体以外の別のものに対して使用されることは如何なる場合にも見られない. もし「[アートマン]という言葉が身体以外のものに対して使用されるならば, 確かに「アートマン」という言葉を聞くことによって「[これが]アートマンである。」という知が生じるだろうが….

知覚不可能なものを対象とする聖言 (adr̥ṣṭārthāgama) もまた, 信頼しうる人の言葉に欺くことがないという点で共通しているから, 推理となる. しかしながら, このような信頼しうる人は決して存在しない. もし「存在するならば」その人にとっては, このアートマンは直接知覚され, 我々は彼の言葉が聖言であると認めるだろうが….

nāgamaṁ gāhā / na cāyam āgamagamyo 'pi, yato nānumānād āgama bhidyate / yatheho-
rdhve kuṇḍaloṣṭhāyatavṛtte grīvādimati ghaṭaśabdaprayogadarśanāt uttaratra ghaṭaśa-
bdamātraśravaṇāt anvayavyatirekadvāreṇa tatraivānumānam utpadyate / na caivam ayam
ātmaśabdah śārīrād ṛte 'nyatra prayujyamānaḥ kvacid upalabdhaḥ, yatra khalv ātmaśrava-
nād ātmeti pratyayo bhavet, adr̥ṣṭārthasyāpy āgamasyāptavādāvisamvādasāmānyād anumā-
natā / na cāsāv āptaḥ kaścid asti yasyāyam ātmā pratyakṣaḥ syāt, yadvacanam āgamam pra-
tipadyāmahe //

【解説】

「瓶と「瓶」(ghata)」 Cf. VĀBhBV on VĀBh (b) 1552: tathā hi --- śabdam pramānam āgama ucyate, śabdaś ca dvividhaḥ --- dr̥ṣṭārthaviśayaḥ, adr̥ṣṭārthaviśayaś ca / tatra dr̥ṣṭārthaviśayā śabdād yā pratītiḥ, sā vastuto 'numānasamutthaiva, yataḥ kvacit prathamam pṛthubudhnodarordhvaku-
ṇḍaloṣṭhāyatavṛttagrīvādimati ghaṭapadārthe ghaṭaśabdam prayujyamānam dr̥ṣṭvā taduttarakālam kvāpi “ghaṭam ānaya” ityādiśabdam śrūtvā 'pṛthubudhnodarādīmadartha eva ghaṭa ucyate, tathā-
bhūtapadārtha eva ghaṭaśabdaprayogapravṛtteḥ, yathā pūrvam kumbhakārāpaṇādau, ghaṭaśabdaś cāyam idānim api śrūyate, tasmāt tathābhūtasyaiva pṛthubudhnodarādīmataḥ padārthasya ma-
yānayanādikriyākartavyā' ity anumānam vidhāya pramātā ghaṭānayanādikriyām karoti, ity evam dr̥ṣṭārthaviśayam śabdam pramānam vastuno nānumānād bhidyate / (言葉に基づく認識根拠が「聖言」と呼ばれる. そして言葉は二種である. 知覚可能なものを対象とするもの (dr̥ṣṭārthaviśaya) と知覚不可能なものを対象とするもの (adr̥ṣṭārthaviśaya) である. そのうち, 言葉に基づいて知覚可能なものを対象とする知が生じるが, それは事実上推理が生起することに他ならない. というのも, まず最初にどこかで, 平たい底部 (pṛthubudhna), 腹部 (udara) を持ち, 上に向かって輪になった唇形状 [の粘土を] 引き伸ばして出来た (kuṇḍaloṣṭhāyatavṛtta), 首部などを持つ (grīvādimat), 「瓶」という範疇のものに対して, 「瓶」という語を使用していることを経験した上で, その後, どこか [別の所] でも, 「瓶を持ってこい」などという言葉聞いて, 「【主張】平たい底部,

腹部などを持つものだけが「瓶」と呼ばれる。【証因】 そのような範疇のものだけに「瓶」という言葉の使用が起こるから。【喩例】 たとえば以前に壺作りの店などで「瓶」という言葉の使用が見られたように、そして、今またこの「瓶」という言葉が聞かれている。したがって、私はそのような平たい底部、腹部などを持つ範疇のものだけを持ってくるべきである。」という推理をもたらす。その後、認識者は瓶を持ってくるなどの行為を行う。以上のように、知覚可能なものを対象とする言葉に基づく認識根拠は、事実上推理と異なるのである。).

ジナバドラの自註においても、まず聖言を「知覚可能なもの」「知覚不可能なもの」という対象の二種に基づいた二分類が意識されている。この聖言の二分類は『ニャーヤ・ストラ』に見られる二分類 (Cf. NyS 1.1.8: sa dvididho dr̥ṣṭādr̥ṣṭārthatvāt /.) を採用したものと思われる。前者「知覚可能なもの」を対象とする聖言の場合、次のような構造を意識していると思われる。

X	「瓶」という言葉の使用	anvaya
~X	~「瓶」という言葉の使用	vyatireka

ここに見られるようにジナバドラが言う「肯定的・否定的共在」とは、遍充を意識した用語ではなく、あるものに対して語の使用が見られるか否か、という具体的な共在関係を指していると思われる。この場合、Xに相当するものの確定は、過去に「瓶」という語の使用が確認されたもののみに限られ、語使用の有無により取舍選択が行われていることになる。ジナバドラは、「アートマン」という言葉の使用を問題としており、その言葉の使用が見られるものは身体だけであり、身体とは異なるアートマンを否定していることを主張しているのであろう。唯物論者説によれば、身体こそがアートマンであり、身体とは別にアートマンが存在していることを否定する。したがって、「アートマン」が指すものは身体に他ならないのである。

[聖言と推理] Cf. PS II.5ab: yid ches tshig kyang mi slu bar // mtshungs phyir rjes su dpag pa nyid // (*Skt.: āptavākyaḥviśaṃvādasāmānyād anumānatā /) (信頼しうる人の言葉も、欺かないという点で共通しているので、推理である。) ; PSV on PS II.5ab: yid ches pa'i tshig nyid bzung nas kyang mi bslu bar mtshungs pa'i phyir de yang rjes su dpag pa nyid du brjod do // de skad du yang / ming gi las rnam kyī sngon du mngon sum song ba'i phyir ro zhes 'byung ngo //; PST on PS II.5, p.31: āptāḥ pratyakṣataḥ svargādīnām svabhāvaṃ gr̥hītvā sañjñāṃ praṇayanti / upalakṣaṇamātram ca sañjñākarma veditavyam / sarvam eva hi te 'rthadarśanapūrvakam eva vyāharanti / anyathāptā eva na syuḥ / tasmāt teṣāṃ sarvam eva vaco 'viśaṃvādi / ataś cānumānam iti / (信頼しうる人は、直接知覚によって天界などの本質を把握した上で、名称付けを行う。そしてこの「名称付けという行為」は、単なる部分的例示と理解すべきである。というのも、彼ら[信頼しうる人たち]が語る一切すべての[言葉]は、対象の知覚を前提とするものだけだからである。そうでなければ、信頼しうる人そのものが存在しないことになってしまう。したがって、彼らの一切すべての言葉は、欺くことがないのである。そして、この[欺くことがない、という]点に基づいて、[信頼しうる人の言葉は]「推理」といわれる。) ; VĀBhBV on VĀBh (b) 1552: yad api svarganarakādyadr̥ṣṭārthaviśayaṃ śā-bdam pramānam, tad api tattvato 'numānam nātivartate, tathā hi --- 'pramānam svarganarakādyadr̥ṣṭārthaviśayaṃ vacanam, avisaṃvādivacanāptapranītatvāt, candrārkkoparāgādivaca-

navat' ity evamanumānād eva tatra pramāṇatā / (天界・地獄などという知覚不可能なものを対象とする言葉に基づく知は正しい認識根拠であるが、これも事実上推理を超えるものではない。すなわち－【主張】天界・地獄などという知覚不可能なものを対象とする言明は正しい認識根拠である。【証因】欺かない言葉を語る信頼しうる人によってもたらされたものであるから。【喩例】[天文学者による]月食・日食などについての言明のように。]という推理のみに基づいて、それ(言葉に基づく知)に正しい認識根拠であること[が承認されるのである。].)

聖言という認識根拠を推理に含めるあり方について、ジナバドらは仏教論理学者ディグナーガの『プラマーナ・サムッチャヤ』を引用し対論者の説としている。ディグナーガの意図は、北川1965:93によれば、聖言を聞いたのちに、その認識に従って行動した場合に支障を生ずるか否か、によってその聖言の妥当性が判断される、というものである。独自相(svalakṣaṇa)ではなく一般相(sāmānyalakṣaṇa)を対象とする推理の妥当性は、後の認識者の取る活動の結果によって決定される。聖言もまた直接知覚のように眼前にあるものが対象ではないため、推理と同じような形でその妥当性が保証されるというのである。この、認識がその後の活動を「欺かない」という点は、後にダルマキールティによって正しい認識根拠の定義に盛り込まれていくのである。

ジナバドらは、「欺かない」という点では推理と共通するものの、そのような言葉を持つ具体的な人間がないことを主張している。つまり、既に直接知覚によってアートマンが認識され得ないことを前主張として述べているため、アートマンを知覚できる人間は存在せず(VĀBh(a) v.2004; 宇野2018:3-4)、しかも、そのような人間が信頼しうる人として聖言をもたらすということもあり得ない。また、アートマンが知覚されない限り、アートマンと証相との関係も経験不能となり、知覚を前提とする推理は発動できない(VĀBh(a) vv.2005-6; 宇野2018:5-9)。ゆえに、たとえ聖言が推理に還元されようとも、アートマンが聖言によって理解されること自体あり得ないことになるのである。なお、上記に示したようにディグナーガ自身も、信頼しうる人の言語活動は「直接知覚を前提としている」(mngon sum song ba)ことを述べており、ジネーンドラブッディも「対象の知覚を前提とするもの」(arthadarśanapūrvakam)と説明する。ディグナーガ以降のPS II.5abに対する仏教論理学派の解釈については、Krasser 2013を参照されたい。

《パラレルテキスト》

ĀAV on ĀA 1.1.1.Sū 1(3), p.34: āgamasyaṅpi vivakṣāyām pratipādyamānāyām anumāntarbhāvād anyatra ca bāhye 'rthe sambandhābhāvād apramāṇatvam /; TRD, p.219: tathā nāpy āgamagamyā ātmā / avisaṃvādivacanāptapraṇītatvena hy āgamasya prāmāṇyam / na caivaṃbhūtam avisaṃvādivacanam kaṃcanāpy āptam upalabhāmahe yasyātmā pratyakṣa iti / anupalambha(labha)mānās ca katham ātmānam vipralabhemahi /

【VĀBh 2008】

(VĀBh (b, c): 1553; VĀBh (d): 2032; VĀBh (e): 2028)

「さらに諸々の聖言は互いに矛盾を孕んでいる。このことから [アートマンに対する] 疑

惑が結びついている。[故に] アートマンは全ての認識根拠の領域を越えている、というのが貴方（インドラブーティ）の考えなのである。」

jam cāgamā viruddhā paropparam ato vi saṃsāyo jutto /

savvappamānavisayātīto jīvo tti te buddhī //2008//

[Skt.: yac cāgamā viruddhāḥ paraspāram ato 'pi saṃsāyo yuktaḥ /

sarvāpamānaviṣayātīto jīvo iti te buddhiḥ //]

【VĀBhSV on VĀBh 2007】

「jam cā [云々]」[という] 韻文について。また、実に諸々の聖言（āgama）は互いに矛盾を孕んでいる。このことから [アートマンには] まさに疑惑が結び付くのである。それは例えば—

「人間（puruṣa）というものは、感官の領域が [及ぶ] 限りのものに他ならない。妻よ、学識のない者たち（abahuśruta = āstika）が語っていることは、実に狼の足跡 [のようなえせ推理] なのである。」

[さらに] 例えば [以下のように] 言われている。

「知識という要素の集合は、それら [地元素などの] 物質要素の集合を [原因として] 生じ、同じそれら [物質要素の滅] に応じて [絶対的に] 滅するのである。[地獄に住むものなどの] 死後の存在はないのである。」

同じ様に—

「比丘たちよ。色（物質要素：rūpa）は我（pudgala）ではない。」

云々と [言われている]。

上記と同様に、[アートマンが] 存在することに対する言明がある。

「身体を有するアートマンにとっては、愛着と嫌悪を滅することは不可能である。[しかし] まさに身体を持たないアートマンであるならば、愛着と嫌悪は [そのアートマンに] 触れることはない。」

同じ様に—

「天界を望む者は、アグニホートラ祭を実行すべし。」

云々 [という言明がある]。

同じ様にカピラ [の教えを] 継承するもの（kāpila = Sāṃkhya）等は、[次のように] 考えている。

「[非行為者であり、属性を欠き、享受者であり、精神体である] プルシャ（puruṣa：純粹精神）は存在する。」

以上のことから [これら諸々の聖言は] 互いに矛盾を孕んだものである。聖言もまた正しい認識根拠ではない。故にこれ [アートマン] は全ての認識根拠の領域を超えている、というのが貴方（インドラブーティ）の意図である。

jam cā° gāhā / yataś cāgamāḥ parasparavirodhinaḥ khalu, ato 'pi saṃsāyo¹ yuktarūpas tad yathā

“etāvān eva puruṣo yāvān indriyagocaraḥ /

bhadre vṛkapadaṃ hy etad yad vadanty abahuśrutāḥ //”

yathoktam “vijñānaghana evaitebhyo bhūtebhyaḥ samutthāya tāny evānu vinaśyati na pretyasam-
jñāsti” tathā “na rūpaṃ bhikṣavaḥ pudgalaḥ” ityādi / tathā ‘stītvapratipattayaḥ --- “na ha vai śarīra-
sya priyāpriyayor upahatir asti, aśarīraṃ vāva santam priyāpriye na sprśataḥ” iti / tathā “agni-
hotram juhuyāt svargakāmah” ityādi / tathā kāpilādayo ‘bhimanyante “asti puruṣaḥ” ity atah paras-
paravirodhitvāt āgamo ‘py apramāṇam, atah sarvapramāṇagocarātīto ‘yam ity abhiprāyas te //

(1. VĀBhSV: samśayā ; 訂正は Muni Jambūvijaya 師の教示による.)

【解説】

[狼の足跡]

“etāvān eva” で始まるこの韻文は, Cārvāka や Lokāyata と呼ばれる唯物論者たちの伝統に保持されるものであり, Pathak 1965: 139において *Bārhaspatyasūtra* 16として (ab 句のみ), また生井 1976, 1996において「Brhaspati に帰せられる詩頌」B2として分類整理されているものである. etāvān eva 韻文はジャイナ教文献にのみ現れるものではなく, 仏教などの他学派文献にも唯物論者説を提示する前主張の中に経証として引用される. ジャヤラーシの *Tattvopaplavasimha* 以外に現存する文献が存在しない唯物論者の説を理解するための, 貴重な断片であると言えよう.

梶山1989: 315によれば, この韻文はパーヴィヴェーカの『般若灯論』に引用され, チャンドラキールティにその同じ読みが継承されているとされる (Bhattacharya 2002は『入中論』での引用にも言及している). 梶山1989では, この韻文の「学識者たち」(bahuśrutāḥ) という読みを問題にし, まず中観派の伝統では「学識者たち = āstika」と理解していることが示されている. そして, 「学識者たち」が「学識のない者たち」(abahuśrutāḥ) へと読みの変化が起こり, この変化に関わる解釈の相違を明らかにしている. ここでは, Bhattacharya 2002で挙げられた引用断片の読みも含めて, このテキスト変遷問題について若干の解説を試みたい.

Pāda A

etāvān eva puruṣo	etāvān eṣa puruṣo	etāvān eva loko 'yam
VĀBhSV on VĀBh(a) v.2007	VĀBhSV on VĀBh(a) v.994	SDS (H) (Somatilaka / Guṇaratna) v.81
PrasaP p.360	VĀBhVṛ on VĀBh(d) v.2430, p.585	LTN v.108
ĀC p.336	TAASṬ on TAAS 1.34, p.116	VĀBhBV on VĀBh(b) v.1553
TSP on TS vv.1872-7, p.523	VĀBhVi on VĀBh(a) v.2406, p.439	ĀMV on ĀN(d) v.600, f.314b
VĀBhVṛ on VĀBh(d) v.2032, p.482		DhST on DhS v.43, f.27b
SKMV on SK v.17, p.29		BKBhV on BKBh v.278, I. p.84
ĀHV on ĀN(a) v.600, f.242b		SDS(R) v.160
SKAV, f.14 b; f.73b		LSDS p.156

Pāda B

yāvān indriyagocaraḥ except SKMV	yāvad indriyagocaraḥ SKMV on SK v.17, p.29
-------------------------------------	---

梶山1989では考察されていないが, ab 句のテキスト変遷にも何らかの意図があるように思われる. 「人間」(puruṣa) と「この世界 (世間)」(loko 'yam) の相違は, 上記に示す通り, などら

な年代の変遷が確認できる。すなわちジナバドラ（6-7世紀：VĀBhSV）やジナダーサ（7世紀：ĀC）、仏教徒であるチャンドラキールティ（7世紀：PrasaP）やカマラシーラ（8世紀：TSP）などは「人間」の読みで一定している。また、“etāvān eṣa puruṣo”という異読も、ジナバドラ、コートイ・アーチャールヤ（8世紀：VĀBhVṛ）、シッダセーナ・ガニ（8-9世紀：TAAST）などの比較的早い時期の論者に見られ、「人間」が主題となっていることに相違はない。一方、「この世界（世間）」という読みは、マラダーリ（11-12世紀：VĀBhBV）、マラヤギリ（12-13世紀：ĀMV, DhST, BKBhV）、ラージャシェーカラ（14-15世紀：SDS(R)）などの後代論者に集中している。この変遷でポイントとなるのは、おそらくハリバドラ（8-9世紀）であろう。彼はガナダラヴァーダについては「人間」（ĀHV）、それ以外の独立作品では「この世間」（SDS(H), LTN）というように、二種の読みを示している。

Bhattacharya 2002: 138 は、「人間」という語の使用は「身体即我という説」（dehātmanvāda）を意識し、「この世界（世間）」という語は「他世を否定する説」（paralokāpavāda）や「直接知覚のみを正しい認識根拠とする説」（pratyakṣaikaḥpramāṇavāda）を導くと言う（これら唯物論者が奉じる各説については、生井1976, 1996を参照されたい）。この考え方は、ガナダラヴァーダに関してもその通りであり、ジナバドラは「身体とは別にアートマンは存在しない」という前主張を提示するために当該韻文を引用している。ハリバドラがĀHVにおいて「人間」の読みを採用することも、このアートマン存在否定という文脈を考慮したものと考えて差し支えないであろう。ただし、彼は唯物論者説を全般的に披瀝するSDS(H)やLTNにおいては、「この世界（世間）」の読みを採用し、単にアートマンの否定にとどまらず、直接知覚以外の認識根拠の否定、他世の否定などの目的の元に、汎用的にこの韻文を改変したことがうかがわれる。

このハリバドラの「この世界（世間）」という読みは、後代の論者たちにも影響を与えている。マラヤギリはアートマン存在否定を意図する文脈においても、「この世界（世間）」の読みで統一している。当然のことであるが、「この世界（世間）」にはそこに住む「人間」をも包含しており、アートマン否定の文脈に大きな齟齬を来すことはない。おそらく、ジャイナ教の伝統では、最初期から「人間」という読みが伝えられており、アートマン否定の文脈でこの韻文のab句が引用されたのであろう。この読みの改変がハリバドラに帰せられるか否かを確定することは出来ないが、少なくともハリバドラは改変によってアートマン否定以外の唯物論者説がより明白になることを意識していたと思われる。

Pāda C

bhadre vṛkapadaṃ hy etad	bhadre vṛkapadaṃ paśya
VĀBhSV on VĀBh(a) v.2007	ĀC p.336 (paśya); VĀBhVṛ on VĀBh(d) v.2032, p.482;
PrasaP p.360	SDS(H) (Somatilaka / Guṇaratna) v.81; ĀHV on ĀN(a) v.600, f.242b;
LTN v.108 (with a variant: paśya)	SKAV, f.14 b; f.73b; VĀBhBV on VĀBh(b) v.1553;
	ĀMV on ĀN(d) v.600, f.314b; SDS(R) v.160; LSDS p.156

Pāda D

yad vadanti bahuśrutāḥ	yad vadanty abahuśrutāḥ
PrasaP p.360	VĀBhSV on VĀBh(a) v.2007; ĀC p.336;
ĀHV on ĀN(a) v.600, f.242b	VĀBhVr on VĀBh(d) v.2032, p.482
LTN v.108; SDS (H) (Somatilaka) v.81	SDS (H) (Gūnaratna) v.81
VĀBhBV on VĀBh(b) v.1553	SKAV, f.14b; f.73b
LSDS p.156	SDS(R) v.160

梶山1989によれば、当該韻文は当初「学識者」という読みが存在し、ソーマティラカは「学識者」を継承、グナラトナは「学識のない者」と読みの変更を行なったと推定している。ソーマティラカ（14世紀）とグナラトナ（14-15世紀）の年代順、グナラトナが「学識者」という読みを知っていたことを鑑みれば、梶山が言うとおりの両者の解釈に若干の相違があることは確かであろう。すなわち、次の三つの解釈である。

- (1) ソーマティラカ解釈：「狼の足跡が見たい」と言う妻に対して、自分の指で捏造した足跡を見せて、直接知覚のみが確実な認識根拠であることを示す。学識者たち（bahuśrutāḥ = 唯物論者）はこのような「狼の足跡」を語っている。
- (2) グナラトナ第一解釈：唯物論者が自分の指で足跡を捏造し、学識のない者たち（abahuśrutāḥ = アースティカ）はそれを見て狼の存在を推理する。このことから、推理の不確実性を示す。
- (3) グナラトナ第二解釈：唯物論者が自分の指で足跡を捏造し、世間で「学識者」（bahuśrutāḥ = アースティカ）と呼ばれている愚か者たちはそれを見て狼の存在を推理する。このことから、推理の不確実性を示す。

上記の(2)(3)にはほぼ相違はなく、(2)は「世間通俗の意味では学識者であるが、実は学識のない者」、(3)は世間でいわゆる「学識者」と呼ばれている者（皮肉・揶揄の意味）と理解できる。いずれにせよ、この cd 句は推理の不確実性を示すことが主眼となっている。

cd 句のテキスト異読について、ジャイナ教の伝統では、おそらく「学識のない者」という読みは古いものと考えられる。ジナバドラ自身がこの読みを示しており、またジナダーサ（ĀC）、コーティ・アーチャールヤ（VĀBhVr）が追随していることから、「学識のない者 = アースティカ」という解釈は本来的に存在していたはずである。ここでもハリバドラが二様の解釈の起点となっており、ソーマティラカやグナラトナに影響を及ぼしていると言える。ジナバドラらの本来的解釈は、おそらくグナラトナ第一解釈の直接のソースになっていたと思われる（グナラトナがジナバドラに大きく影響を受けていることは、本論文シリーズでの《パラレルテキスト》を参照されたい）。

[BĀU 2.4.12]

Cf. ŚBr 14.5.4.12: sa yathā saindhavakhillyaḥ / uḍake prāsta uḍakam evānuviliyeta nāhāsyodgrahaṇāyeva syād yato yatas tvādādita lavaṇam evaivaṃ vā 're idam mahadbhūtam anantam apāraṃ vi-jñānaghana evaitebhyo bhūtebhyāḥ samutthāya tāny evānuvinaśyati na pretya saṃjñāstīty are bravīmīti hovāca yājñavalkyaḥ //; BĀU 2.4.12: sa yathā saindhavakhilya uḍake prāsta uḍakam evānuviliyeta na hāsyodgrahaṇāyeva syāt / yato yatas tvādādita lavaṇam eva / evaṃ vā ara idam

mahad bhūtam anantam apāraṃ vijñānaghana eva / etebhyaḥ bhūtebhyaḥ samutthāya tāny evānu vinaśyati / na pretya saṃjñāstīty are bravīmi / iti hovāca yājñavalkyaḥ //.

ジナバドラが自註においてジーヴァの存在を否定する根拠として挙げる聖言の中でも、この 'vijñānaghana' という語で始まるウパニシャッドの一節は、極めて重要である。というのも、この一節については、ジナバドラ自身が vv. 2043-2045において唯物論的な解釈を提示した上で、vv. 2048-2051においてジャイナ教の立場からの解釈を示して、唯物論者説を批判するからである。この一節を巡る唯物論的解釈とジャイナ教などのアートマンを認める学派の解釈は、ジナバドラに留まらず様々な文献に現れる。筆者は既にジナバドラの解釈についての論考を公表しているが (Uno 1999), v. 2043以降の翻訳を提示する際に、他学派解釈を含め改めて考察を深めたい。なお、上記の翻訳は vv. 2043-2045に展開される唯物論的解釈を反映させている。

[仏教文献の断片]

Cf. VĀBhBV on VĀBh (b) 1553: sugatas tv āha --- na rūpaṃ bhikṣavaḥ pudgalaḥ ityādi /; AKBh p.564: kiṃ tarhi bhagavatoktaṃ "rūpaṃ anātmā yāvad vijñānam anātmā" iti /.

マラダーリが「仏教徒」(sugata) に帰する断片であるが、完全に一致した経典は同定できなかった。上記に挙げた『アビダルマ・コーシャ』が引用するような、「色は我ではない。受は…想は…行は…識は我ではない」と五蘊が「我ではない」ことを説く経典であることが予想される。五蘊の全てが我でないことにより、我 (pudgala / ātman) そのものの存在を否定する言明に他ならない。本庄1982: 52-54を参照せよ。

[アートマンの存在を説く聖典]

Cf. ChU 8.12.1: maghavan martyaṃ vā idaṃ śarīramātaṃ mṛtyunā / tad asyāmṛtasyāśarīrasyātmano 'dhiṣṭhānam / ātto vai saśarīraḥ priyāpriyābhyām / na vai saśarīrasya sataḥ priyāpriyayor apahatir asti / aśarīraṃ vāva santaṃ na priyāpriye sprśataḥ /; MaiU 6.36: atrodāharanti / agni-hotraṃ juhuyāt svargakāmaḥ /.

前者 *Chāndogyaopaniṣad* では、身体が滅したのちのアートマンが予想されており、死後存続するアートマンの存在が前提とされた表現になっている。後者の天啓聖典 (śruti) は、精確にヴェーダ聖典に同定し難いが、様々な文献に天啓として例示される文言である。これも死後存続するアートマンなしには、「アグニホートラ祭→天界」という構造は成り立たず、アートマンの存在を示す聖言と看做しうる。

[サーンキヤ学派文献の断片]

Cf. VĀBhVr on VĀBh (d) 2032: asti puruṣaḥ akartā nirguṇo bhoktā cidrūpa ity ato 'viśvāsaḥ /; VĀBhBV on VĀBh (b) 1553: kāpilāgame tu pratipādyate --- "asti puruṣo 'kartā nirguṇo bhoktā cidrūpaḥ" ityādi /; ĀHV f.242b: tathā "akartā nirguṇo bhoktā" ityādiś cānyaḥ /; ĀMV f.314b: anye punar evaṃ "akartā nirguṇo bhoktā" ityādi /; VĀBhBV on VĀBh (b) 216: āha paraḥ --- nanv ātmano ni-

skriyatvāt karṭṛtvādyabhāvaḥ sāmkyānām na bādhyai kalpate; tathā ca tair uktam --- “akartā nir-
guṇo bhoktātmā” ityādi / etad apy ayuktam, tasya nīskriyatve pratyakṣādīpramāṇopalabdha-
bhokṭṛtvādikriyāvirodhaprasaṅgāt /

諸注釈が示すように、サーンキヤ学派の断片であり “asti puruṣo 'kartā nirguṇo bhoktā cidrūpaḥ” と
いう一節の一部であると考えられる。現在のところジャイナ教文献以外にこの断片は発見出来てい
ないが、サーンキヤ学派の説くプルシャの特質が纏められた一文であることは確実であろう。上記
最後のマラダーリの引用は、当該のガナダラヴァーダ箇所ではなく、ジーヴァの遍在性 (sarvaga-
tatva) を批判する韻文 (VĀBh (a) v.215, (b) v.216) に対する註釈部分である。ジャイナ教にとって、
ジーヴァは行為者 (karṭṛ) であり、かつ享受者 (bhokṭṛ) でもあるので、サーンキヤ説とは相容
れない。このサーンキヤ説との相違点については、ガナダラヴァーダの行為者性・支配者性・享受
者性などを論証する箇所 (VĀBh (a) vv.2022-2024) を訳出する際に、改めて考察する予定である。

《パラレルテキスト》

ĀAV on ĀA 1.1.1.Sū 1(3), p.34: pramāṇatve vā parasparavirodhitvād nāpy āgamena /; TRD, p.219:
kiṃ ca, āgamāś ca sarve parasparaviruddhaprārūpiṇaḥ / tataś ca kaḥ pramāṇam kaś cāpramāṇam
iti saṃdehadāvānalajvālāvaliḍham evāgamasya prāmāṇyam / tataś ca nāgamapramāṇād apy āt-
masiddhiḥ /

略号表 (追加分)

【テキスト】

ĀA: *Ācārāṅgasūtra*:

(a): Muni Jambūvijaya (ed.), *Ācāryappravara-Śrī-Śīlācāryaviracitavaraṇavibhūṣitam*

*Pañcamagaṇadharaḥbhagavacchrī Sudharmasvāmisaṅdr̥bdham paṇḍarāyatam Śrī Ācārāṅgasū-
tram*. Śrī Siddhi-Bhuvana-Manohara Jaina Granthamālā Granthāṅkaḥ 3, Ahmedabad: Śrī Siddhi
Bhuvana Manohar Jaina Trust, 2008.

(b): *Śrī Ācārāṅgasūtram / Śrīmadgaṇadharaḥbhagavara-Sudharmasvāmi-ḥṣṇitam*

Śrutakevalībhadrabāhu-svāmi-dṛbdha-niryuktīyuktam Śrīmac-Chīlāṅkācārya-vihita-vivṛtiyutam
Śrī Ācārāṅgasūtram (pūrvabhāgaḥ). Āgamodayasamiti No.5, Mahesana: Āgamodayasamiti, 1916.

ĀAV: *Ācārāṅgavṛtti* (Śīlāṅka):

(a): See ĀA(a).

(b): See ĀA(b).

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu):

BĀU: *Brhadāranyakoṇiṣad*: See EPU.

BKBh: *Bṛhatkalpabhāṣya* (Saṅghadāsa): Muni Caturvijaya & Muni Puṇyavijaya (eds.), *Bṛhatkalpasūtram*.
6 Vols., Ātmānanda Jaina Grantha Ratnamālā, Nos. 82, 83, 84, 87, 88, 90, Bhavnagar: Jaina Āt-
mānanda Sabhā, 1942 (Reprint, 2002).

BKMV: *Bṛhatkalpavṛtti* (Malayagiri): See BKBh.

ChU: *Chāndogyoṇiṣad*: See EPU.

EPU: L. P. Limaye and R. D. Vadekar (eds.), *Eiteen Principal Upaniṣads, Vol. I*. Poona: Vaidika Saṃśo-

- dhana Mandala, 1958.
- KathaU: *Kathopaniṣad*: See EPU.
- KL: *Kalpalatā* on KS (Samayasundara Gaṇi): *Śrīmat-Kharataragacchādhiśvara-Śrī-Akallarasāhijalāluddīna-ṣṛībodhaka-Śrīmaj-Jinacandrasūri-śiṣya-Sakalacandragāṇi-śiṣya-vācaka-Samayasundaragāṇiviracitayā Kalpalatāvyaḥkhyayā Samalankṛtam Śrutakevali-Śrī-Bhadrabāhusvāmipraṇītam Śrī Kalpasūtram*. Jinadatta Sūri Prācinapustakoddhāra Fund Granthānka 42, Mumbai, 1939.
- LṢDS: *Laghuṣaddarśanasamuccaya* (Anonymous): See ṢDS(H)(b).
- LTN: *Lokatattvanirṇaya* (Haribhadra Sūri):
 (a): Luigi Suali (ed.), “Il «Lokatattvanirṇaya» di Haribhadra.” In *Giornale della Società asiatica italiana*, 18: 263-319, 1905.
 (b): *Śrī Haribhadrasūri Granthasamgrahaḥ*. Ahmedabad: Jaina Grantha Prakāśaka Sabhā, 1939.
- MaiU: *Maitrāyaṇyupaniṣad*: See EPU.
- PrasaP: *Prasannapadā* (Candrakīrti): Louis de la Vallée Poussin (ed.), *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, 1903-1913 (Delhi: Motilal Banarsidass, 1992).
- PS, PSV: *Pramāṇasamuccaya, Pramāṇasamuccayavṛtti* (Dignāga): See 北川1965.
- PST: *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (Jinendrabuddhi): Horst Lasic, Helmut Krasser, Ernst Steinkellner (eds.), *Jinendrabuddhi's Viśālmalavati Pramāṇasamuccayaṭīkā Chapter 2, Part I: Critical Edition*. Beijing, Vienna: China Tibetology Publishing House, Austrian Academy of Sciences Press, 2012.
- ŚBr: *Śatapathabrāhmaṇa*: Chinnaswami Śāstri (ed.), *Śatapatha Brāhmaṇa of the White Yajurveda in the Mādhyandina Recension*. Kashi Sanskrit Series 127, Varanasi: Chaukhamba Sanskrit Sansthan, 1984².
- ṢDS(H): *Ṣaddarśanasamuccaya* (Haribhadra Sūri):
 (a): Mahendra Kumār Jain (ed.), *Ṣaddarśanasamuccaya of Haribhadra Sūri [with the Commentaries of Tarka-rahasya-dīpikā of Guṇaratnasūri and Laghuvṛtti of Somatilaka and an Avacūrṇi]*. Bhāratīya Jñānapīṭha Publication Series No.36, New Delhi: Bhāratīya Jñānapīṭha, 1969 (2nd. Ed., 1989).
 (b): Vijayajambū Sūri (ed.), *Śrī Ṣaddarśanasamuccayaḥ Saṭīkaḥ*. Dabhoi: Śrī Muktabāi Jñānamandir, 1950.
- ṢDS(R): *Ṣaddarśanasamuccaya* (Rājāśekhara Sūri): Muni Vairāgyarativijaya (ed.), *Pūjyācārya-Śrī-Haribhadrasūri-viracitaḥ Pūjyācārya-Śrī-Rājāśekharasūri-viracitaś ca Ṣaddarśanasamuccayaḥ*. Śrī Vijayamahodayasūri Granthamālā 5, Pune: Pravachan Prakashan, 2002.
- ṢDSL(V): *Laghuvṛtti* on ṢDS (Somatilaka): (a): See ṢDS(H)(a). (b): See ṢDS(H)(b).
- SKMV: *Mātharavṛtti on Sāṃkhyakārikā* (Mātharācārya): Vishnuprasad Sharma (ed.), *Sāṃkhyakārikā by Īśvarakṛṣṇa with a Commentary of Mātharācārya*. Chowkhamba Sanskrit Series No.296, Benares: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1922.
- TAASṬ: See TAAS.
- TS: *Tattvasamgraha* (Śāntarākṣita): Embar Krishnamacharya (ed.), *Tattvasamgraha of Śāntarākṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. 2 Vols., Gaekwad's Oriental Series 30 & 31, Baroda: Oriental Institute, 1984, 1988 (1st. ed. in 1926).
- TSP: *Tattvasamgrahaṇājīkā* (Kamalaśīla): See TS.

【参考文献】

Bhattacharya, Ramkrishna

2002 “Haribhadra’s *Ṣaḍḍarsana Samuccaya*: Verses 81-84: A Study.” In *Jain Journal*, Vol.XXXVI, No.3: 134-148.

Honjo Yoshifumi (本庄良文)

1982 「三世実有説と有部阿含」『仏教研究』12：49-61.

Kajiyama Yuichi (梶山雄一)

1989 「Vrka-pada」藤田宏達博士還暦記念論集『インド哲学と仏教』京都，平楽寺書店，311-326.

Kitagawa Hidenori (北川秀則)

1965 『インド古典論理学の研究－陳那 (Dignāga) の体系－』鈴木学術財団.

Krasser, Helmut

2013 “Logic in a Religious Context: Dharmakīrti in Defence of *āgama*.” In Vincent Eltschinger, Helmut Krasser and John Taber (eds.), *Can the Veda Speak?: Dharmakīrti Against Mīmāṃsā Exegetics and Vedic Authority: an Annotated Translation of PVSV 164, 24--176, 16*, Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 83-118.

Namai Chisho (Mamoru) (生井智紹)

1976 「後期仏教徒による Bārhaspatya 批判 [I] -Bārhaspatya 思想の概観-」『インド学報』2：33-74.

1996 『輪廻の論証－仏教論理学派による唯物論批判－』大阪，東方出版.

Pathak, Sarvānanda

1965 *Cārvākadarśan kī Śāstrīya Samikṣā*. Vidyabhawan Rashtrabhasha Ganthamala 76, Varanasi: Chowkhamba Vidyabhawan, 1990^o.

Uno, Tomoyuki (宇野智行)

2018 「ジナパドラのジーヴァ存在論証：ガナダラヴァータ第一章和訳研究（3）」『筑紫女学園大学研究紀要』13：1-10.

* 本稿は，平成29年度筑紫女学園大学・特別研究助成費（一般研究）による研究成果の一部である。

(うの ともゆき：日本語・日本文学科 教授)